

SHOW MEY シネマルーム

★★★

最低。

2017年/日本映画

配給：KADOKAWA/121分

2017(平成29)年12月24日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：瀬々敬久

原作：紗倉まな『最低。』(KADOKAWA刊)

出演：森口彩乃/佐々木心音/山田
愛奈/忍成修吾/森岡龍/
江口のりこ/渡辺真起子/
根岸季衣/高岡早紀

■■■ショートコメント■■■

◆チラシによれば、本作のイントロダクションは次の通りだ。



そんな境遇も性格も異なる女たちの運命は、ある出来事をきっかけに動き始める……。



AV女優・紗倉まなによる話題の文芸小説を『64 -ロクヨン-』(16)の瀬々敬久監督が完全映画化。どうにもならない現実を前に、それでも自分らしく生きようとする女性たちを力強く、時に繊細に描く。人生を変えるきっかけをつかもうとともかく美穂役に、女優としてだけではなく、舞台の企画・演出も手掛ける森口彩乃。AVの仕事为天職だと信じて疑わない彩乃役に、『フィギュアなあなた』(13)『マリアの乳房』(14)の佐々木心音。自分の住む町にもクラスメイトにも馴染めないあやこ役に本作で本格的に女優業を開始した山田愛奈。他にも高岡早紀、渡辺真起子、根岸季衣らの実力派女優が脇を固める。



ラスト、彼女たちの見つめる先には何があるのだろうか。今いる場所から一歩踏み出す勇気をくれる、そんな映画が誕生した。



◆公式ホームページによれば、本作のストーリーは次の通りだ。

橋口美穂（森口彩乃）、34歳。何不自由なく暮らしているものの、どこか満たされない日々。夫の健太（忍成修吾）は何事にも無関心で、子供が欲しいと提案しても忙しい仕事を理由に断られる。最近は病に伏した父を姉の美沙（江口のりこ）と交代で見舞うため、家と病院を往復する毎日。このままずっと同じような生活が続くのだろうか……。そんな空虚な思いを埋めるため、美穂が決心したのはA Vに出ること。今までずっと安定志向だった自分の人生を、ひよっとしたら変えることができるかもしれない。そう信じて彼女は新しい世界の扉を開けるが――。

本間あやこ（山田愛奈）、17歳。小さな喫茶店を営む祖母の知恵（根岸季衣）、東京から出戻った母の孝子（高岡早紀）と3人で、寂れた海辺の町で暮らす。人と接するのが苦手で、クラスメイトとも打ち解けることができない。自分の部屋でキャンパスに向かって絵を描いているときだけが唯一心休まる時間。しかしある日事件が起こる。登校すると、あやこの母親が元A V女優だという噂が広がっていたのだ。定職に就かず、自由奔放な生活を送る孝子は田舎町では目立つ存在。あやこはそんな母親との距離感をいまだに埋めずにいたが、勇気を出して孝子に真相を確かめようとする――。

彩乃（佐々木心音）、25歳。専門学校に通うため、そりが合わない家族から逃げるように上京してきたが、軽い気持ちでA Vに出演。その後人気女優となり、多忙な毎日を送る。この仕事に後ろめたさはない。むしろ天職かもしれないと思う。日比野（森岡龍）という頼りなさげな男とバーで意気投合した彩乃は、そのまま一緒に朝を迎えるが、彼女の仕事を知った母親の泉美（鶴辺真起子）が突然現れ、穏やかな幸福感が一気に吹き飛ばす。A Vの仕事をやめるよう説得する母を置き去りにし仕事へと向かう彩乃だったが、撮影中に意識を失い、そのまま病院へ運ばれる――。

◆私はA V女優に差別意識を持つわけではないが、人気A V女優・紗倉まなの同名小説を知らないし、何の興味もない。しかし、『64 前編、後編』（16年）『シネマルーム38』10頁、17頁参照）で素晴らしい社会問題提起をした瀬々敬久監督が興味を示し映画化した作品と聞き、「こりや必見！」と考え、映画館へ。しかし、その結果は・・・？

◆本作の主演は橋口美穂（森口彩乃）、彩乃（佐々木心音）、本間あやこ（山田愛奈）の3人の女性だが、何故男の瀬々監督が本作に興味を示したの？それは多分『最低。』というタイトルと、そのタイトル通りの生き方をしている女性たちを通じて、今の時代を生きる女性のホンネに迫った内容を評価したためだろう。しかし、残念ながら私は本作も、そして多分その原作も全然評価できない。

◆少しだけ気持ちがかかるのは、高校生のあやくくらいで、A V女優に固執する彩乃の視野の狭さや、その逆のようなあやこの母親（高岡早紀）のバカ女ぶり。そしてまた、一見優等生ながら、その実？？？の美女・美穂の二重人格ぶりを見続けるのはいゝいゝ加減うんざり。別にその生き方は否定しないが、「好きにしろ！」「何故俺がそれを映画館に来て

観なければならぬの！」という感じに、ついイライラ・・・。

◆目下、世間が熱狂している『STAR WARS 最期のジェダイ』のシリーズにも飽きてきたが、「この手」の一見センセーショナルな社会問題提起作にも、いい加減飽きが・・・。

2017（平成29）年12月26日記